

オリンピックは平和的か

—オリンピックの暴力性の問題をめぐって—

藤 田 明 史

Are the Olympic Games Peaceful? —On the Violent Character of Olympiad—

Akifumi Fujita

抄 録

2004年8月に行なわれたアテネ五輪は、2001年9月11日に発生した「米国同時多発テロ」事件後の最初のオリンピックであった。21世紀初頭の暴力が蔓延する世界にあって、平和の祭典といわれるオリンピックのあり方が改めて問われている。オリンピックは本当に平和的であろうか。本稿はオリンピックと戦争の関連性について、「競争」、「停戦」、「政治の美学化」という3つの視点から歴史的に考察する。

キーワード：オリンピック、戦争、暴力、グローバリゼーション、平和

(2004年9月30日 受理)

Abstract

The 2004 Olympic Games in Athens were the first Olympiad after 9.11 in the year 2001. People have begun asking how the Olympic Games, a festival of peace, will confront the world where violence prevails at the beginning of the 21st century. Are Olympic Games really peaceful? In this paper, we are going to make historical considerations about the relation between Olympics and war, taking into account the three factors of competition, truce and aestheticization of politics.

Key words: Olympic Games, war, violence, globalization, peace

(Received September 30, 2004)

1. はじめに — オリンピックと戦争

2004年8月13日から29日まで(現地時間)、ギリシャのアテネにおいて第28回オリンピック大会が開催された。第1回アテネ大会が1896年であるから、108年目に近代オリンピック発祥の地に再び帰郷することになる。202の国・地域から1万6千人の選手・役員が参加した⁽¹⁾。

ところで今回の大会は、2001年9月11日に発生した「米同時多発テロ」事件後の最初のオリンピックであった。米国は「対テロ戦争」と称して、2001年10月7日にはアフガニスタン戦争を、2003年3月20日にはイラク戦争を開始した。とりわけイラクでは過酷な戦いが止むことなく続いている。こうした中でアテネ五輪は行われた。テロ発生が懸念されたため、警備の問題が焦点となった。「エーゲ海上を軍用機が飛び、パトリオット迎撃ミサイルもいつでも発射できる。競技会場や選手村では入念なボディチェックがある。まるで大敵と向き合っているかのよう」であったという⁽²⁾。世界の戦争体制化が急速に進む中で、21世紀の最初のオリンピックであるアテネ五輪は、まさに戒厳下で行われたのであった。

言うまでもなく、戦争とオリンピックは2つの全く異なる社会現象である。ゆえに、両者の因果的な連関を一般的に考察しても、ほとんど意味をなさないであろう。しかし、具体的な現実の歴史状況においては、両者が深く関わり合った事例も多く見られる。たとえば、ドイツのヒトラーが、自己の政権のプロパガンダとしてベルリン・オリンピック(1936年)を利用したことは良く知られている。それはまさに戦争(第2次世界大戦)の前夜であった。同様に、現代の「グローバリゼーション」という特異な状況において、時を同じくして生じた戦争(イラク戦争)とオリンピック(アテネ五輪)との間には、いくつかの点で深い関連性が認められるのである。

ここで、現代のグローバリゼーションとは、諸国民国家から構成される現代の世界システムにおいて、世界のアメリカニゼーション(アメリカ化)とほぼ同義である⁽³⁾。その中に主要には3つの要素が観察される。そして、それらは緊密に結合し、全体として牢固とした構造物が構築されている。それら3要素とは、経済における「新自由主義」(neoliberalism)、宗教・イデオロギーにおける「原理主義」(fundamentalism)、および軍事における「核兵器主義」(nuclearism)である。それぞれに簡潔な注釈を加えれば、新自由主義とは、競争を絶対原理とする市場至上主義のことであり、日本でも「構造改革」の名のもとに弱者切り捨ての発想に立つ諸施策が猛威をふるっている。宗教原理主義とは、キリスト教・イスラム・ヒンドゥー教等において、根本的な教義に戻ることを提唱する政治的な宗教イデオロギーのことであり、核兵器主義とは、核兵器にあくまで固執する一種の「フェティシズム」(物神崇拜)のことであり、他の2要素の強力なバックアップとして機能している。ゆえに、現代における戦争とオリンピックとの関連性を分析しようとする場合、両者がこれらの要素をどの程度併せもっているのかを考察するのが有効であろう。

以上の観点から本稿では、「競争」、「停戦」それに「政治の美学化」という両者をむす

ぶ結節点にある諸問題を取り上げる。そして、これらを考察する中で、戦争とオリンピックの関連性を歴史的に把握する試みを行うことにする。

2. 競争——勝者への讃美

現代オリンピックの起源とされる古代オリュンピアが行われた古代ギリシャは、「アゴン文化」と呼ばれる文化を有していた⁽⁴⁾。アゴンとは、古代ギリシャ語で会合・競争を意味した。具体的には、劇作家たちが悲劇や喜劇を競演する「劇場」、原告と被告が陪審員を前に自説の正しさを競い合う「法廷」、多数決に基づいて政策決定を行う弁論を競う場である「民主制」、およびアゴラ（広場）に公設された「市場」の諸制度によってアゴン文化は特徴付けられる。すなわち、そうした諸制度の基礎をなし、さらには社会の基本的な構成原理であったのがアゴンの精神であった。

最初のオリュンピアは紀元前776年に行われたとされる。それは、「紀元前1200年の破局」と呼ばれる東地中海世界一帯を襲った文化変動の荒波によってそれまでのミケーネ文明の諸王朝が衰退し、前8世紀にポリス社会が成立するまでのいわゆるギリシャの「暗黒時代」のまさに終焉の時期に位置している⁽⁵⁾。それは偶然そうなのではなく、「万人の万人に対する戦争」（ホッブス）そのものである暴力的な社会状況にあって、社会を再組織する起動力となったのがアゴンの精神に基づくオリュンピア競技であった。すなわち、「構造が消失し完全に原子化した社会における裸の個人たちの間の恒常的な社会戦争こそ、ギリシャ人に、逆説的にも、闘争をこの社会に秩序と平和をもたらす手段とすることを強いた⁽⁶⁾」のである（暴力の構造化）。こうして、ギリシャ全土から参加者を集めて開かれた第1回競技会を起点に、オリュンピアは4年毎に開催され、ローマ時代の末まで継続された（最後の開催は393年とされる）。オリュンピアでは、名誉の象徴として優勝者にオリーブの冠が与えられた。名誉が至高の価値であった。逆に不名誉とは市民の共同体であるポリスからの市民権剥奪を意味した。古代ギリシャにおいて、「市民たちは『市民する』ことを競技し、最良の市民たることは、卓越した生の競技者『美にして善なる者』として広く同輩市民に承認されること⁽⁷⁾」であった。

さて、現代に戻ろう。アテネ五輪でもメダル獲得者の頭に表彰台でオリーブの冠がかぶせられ、古代オリュンピアを髣髴させた。それが勝者にとって非常な名誉であることも古代と変わらないであろう。しかし、現代のグローバリゼーション下において、その名誉（優越性）は社会的に何を意味しているのだろうか。それは結局のところ、競争を絶対視し、勝者を無条件に讃美し、優勝劣敗を当然とみなす、1つの社会的価値を意味する他ないであろう。それはメダル獲得競争に各国を駆り立て、それを通じて排他的なナショナリズムとも容易に結びつきうる。さらに、こうした価値は人間の中の略奪的気質とも結びつくであろう。そもそも、こうした略奪的気質に基づく競争を媒介に競技が成立しているがゆえに、人間は勝利のためのあらゆる努力を惜しまないのである。すなわち、「スポーツ（競技と読め——筆者）が優越性の発揮という意味でもっている直接的で無反省的な合目的性は、相当程度まで人間の製作者本能（目的が与えられたとき、その目的を効率的に達成す

ることに喜びを見出す人間的特質の1つ——引用者)を満足させる。もし人間の支配的な衝動が、略奪的気質 (predaceous temperament) からなる無反省な競争性向 (emulative propensities) であるなら、このことは特に妥当する」(ヴェブレン) のである⁽⁸⁾。

人間の略奪的な性向は当然にも戦争と結びつく。したがって、略奪的気質に基づく競争を媒介に、オリンピックと戦争は結びつく。ゆえに、「対テロ戦争」下のオリンピックは、まさにその略奪的な競争という性格のゆえに、戦争体制をいっそう支持・強化する方向に作用するであろう。この意味でオリンピックは——現代のグローバリゼーションのもとで——戦争の存在を正当化する傾向をもつといえるのである(そして、現代の戦争はつねに核戦争につながる危険性をもっている)。既述のように、古代オリンピックは主要には「暴力(戦争)の構造化」(=社会の「平和」化)の機能を担った。これに対して現代オリンピックは、(少なくともその1つの側面において)「暴力(戦争)の正当化」の機能を果たしているのである。

3. 停戦——オリンピックの理念と戦争の新しい性格

古代ギリシャでは、人々がオリュンピアに無事に参集できるために「神聖休戦」(エケケイリア)という慣習が定着していた⁽⁹⁾。ギリシャ社会は慢性的な戦争状態にあり、オリュンピアのもたらす休戦によって、辛うじて社会の秩序が維持されえたからである。したがって、主宰のエリス市から諸国へ派遣されるオリュンピア開催を告げる使者は、休戦を告げる使者でもあった。

近代オリンピックの創設者であるピエール・ド・クーベルタン(1863-1937)は、こうした古代のオリュンピアの理念を近代オリンピックにも甦らせようとした。彼は、1936年のベルリン・オリンピックの開催に向けて行われたラジオ講演「近代オリムピズムの哲学的基礎」(1935年8月4日放送)で次のように述べている⁽¹⁰⁾。

「古代オリムピズムの第一義的かつ基礎的な性格は、それが1つの『宗教』(religion)であるということであり、現代オリムピズムもまた同様である。…オリムピズムの第2の性格は、それが1つの『貴族』(aristocracy)であり、1つの『エリート集団』(elite)であることである。…競技者は“過剰の自由”(freedom of excess)を必要とし、これが、記録を破ろうと全力を尽くす誰もがもつ標語がなぜ『より速く、より高く、より強く』であるかの理由である。しかし、エリートであることは十分ではない。エリートはまた『騎士団』(knighthood)でもなければならぬ。…『停戦』truceの思想はオリムピズムのもう1つの要素である。…私は、武装する敵同士で行われる戦争における敵対行為の中断を、活発で公正なそして礼儀正しい競技を讃美するために心をこめて歓迎するものである。…最後の1つは、美(beauty)である。すなわち、競技の中に芸術と精神とを採り入れることである。」

ここにはクーベルタンの——古代オリュンピアの精神と結び合わされた——中世的なキ

リスト教的騎士道精神がよく表現されているように思われる。そして、停戦の理念は、近代オリムピズムの重要な一要素をなしているのである。なお、宗教的なものと深く結びついているオリンピックの精神は、宗教における原理主義を一要素とする現代のグローバリゼーションと、かなりの親和性をもつであろうことをここで指摘しておきたい。

1939年9月、ナチ・ドイツのポーランド侵攻を機に第2次世界大戦が開始された。しかし、オリンピックの停戦の理念は有効に機能せず、逆に大戦中は第12・13回のオリンピックが中止を余儀なくされた。戦後の最初の五輪は、1948年にロンドンで行われた。

しかし、国連によるオリンピック停戦決議が行われるには、冷戦の終結をまたねばならなかった。1992年のバルセロナ五輪を前に、国連とIOC（国際オリンピック委員会）が合意し、1993年10月にオリンピック停戦（The Olympic Truce）が国連で初めて決議された。すなわち、「総会は、加盟国が国際オリンピック協会により提出された宣言に基づき、各オリンピック競技の開会前の7日目から閉会後の7日まで、オリンピック停戦を遵守するように強く求める」（2項）としたのである。それ以降、大会前に国連が停戦決議を採択することが慣例化した。また、2000年9月8日に国連総会で採択された「国連ミレニアム宣言」にも、「われわれは参加国が、個別的にも集団的にも、現在から将来に亘って、オリンピック停戦を遵守することを強く求める」（II-10）との一項が明記された。アテネ五輪に際して、ギリシャ政府はアテネに設立されている「国際五輪停戦センター」（2000年7月設置）を通じ、各国に賛同の署名を呼びかけた。しかし、実際に署名に応じたのは参加202カ国・地域のうち191で、しかも国名は公表されなかった⁽¹¹⁾。

今日、オリンピック停戦の意義と限界を考えようとするとき、戦争の性格の歴史的変遷について考慮する必要がある。戦争とは集合的・組織的な暴力であり、それは社会機構に依存し、生産と再生産のための要素に係わる。戦争の性格は次の4つに大まかに分類できる⁽¹²⁾（表1）。

原始的戦争は、勇気と単純な紛争解決メカニズムの儀礼的な展示の場であった。伝統的戦争は、原始的戦争が精巧化したもので、軍事カースト——貴族・クシャトリア・サムライ——によって戦われた。名誉の精巧化された規範が勇気に付加された。近代的戦争は、軍事の専門家によって、手段・目的関係における合理性に基づいて、相互の間に戦われた。目的は「あらゆる可能な手段によって」（クラウゼヴィッツ）、相手側に政治的な意思を押し付けることであった。ポスト・モダンの戦争は、近代的戦争がそれを担う当事者にとってあまりにも危険なものとなった時、論理的な回答として出現した。相互に殺しあうかわり

表1 戦争の性格の分類

戦争の性格	社会機構	経済的基礎	基軸価値
原始的戦争	原始的	狩猟、遊牧的または定住的	生殖
伝統的戦争	伝統的	農業、定住的	土地
近代的戦争	近代的（モダン）	工業、定住的	資本
ポスト・モダンの戦争	ポスト・モダン	情報産業、定住的または遊牧的	情報

に、彼らは無防備の者、民間人、および兵站を絶たれた軍人を殺す。

さて、オリンピック停戦の思想は、競技中およびその前後の期間を通じて戦争行為の中断を求める。原始的および伝統的戦争においては、戦争当事者の有する価値は「勇気」・「名誉」・「威厳」というものであり、それはまさにオリンピック競技者の有する価値でもある。したがって、両者（戦争およびオリンピックの各当事者）の間には共感が生まれ、オリンピック停戦は可能となり、さらにオリンピック競技の存在が戦争への「抑止」にもなりえたであろう。しかし、近代的戦争ともなれば、そうした人間的要素に基づく価値の重要性は低下し、科学技術がビルト・インされた武器の質と量によって勝敗の過半は決せられるであろう。そして、オリンピック停戦が受け入れられる余地はきわめて小さくなるであろう。さらには、ポスト・モダンの戦争では、一般市民に攻撃を行う戦闘機のパイロットは全くの無傷であり、そこでは勇気や名誉や威厳はおよそ必要とされない。原始的・伝統的な価値意識からすれば、彼は卑怯であり、不名誉であり、軽蔑にこそ値する。ゆえに、神聖な停戦が受け入れられる可能性はそこではほとんどゼロであろう。

現代のグローバリゼーションにおけるポスト・モダンの戦争は、国家の解体と連携し、超大国の地域紛争への介入を伴う。敵は犯罪者と見なされ、国権としての軍事上の地位を担う主体とは認められない。これは戦争の対抗手段としてのテロリズムとまさに見合っているであろう。アテネ五輪が行われたのは、こうした状況においてであった。オリンピックの停戦機能が働く場は、もともとほとんど無かったというべきであろう。

こうした戦争のポスト・モダンの状況において、オリンピック停戦の可能性が依然として存在するかの幻想を持ち続けることは、その善意の意図に反して、戦争の大義にそうした伝統的価値を超える至高の価値を逆に付与する結果になるように思われる。そして、それはきわめて危険なことである。

4. 「政治の美学化」——マスメディアの機能

アテネ五輪の期間中、テレビの深夜の生中継が高視聴率を連発した。日本選手の活躍を伝える新聞の紙面は、連日、五輪ニュースが一面のトップを「占拠」した。「プロ野球ファンが、テレビでナイター中継を見て、深夜のスポーツニュースで結果を確かめ、さらに翌日のスポーツ新聞を読むように、スポーツファンはスポーツ記事を『読む』ことによって楽しみのサイクルを完結させる。……（だから）我々（編集局——引用者）も新聞を読んで初めて、その日の五輪を見終わったという紙面づくりを心がけた」のであった。そしてその結果、読者は「五輪期間中の1面を見ると、五輪しか報じていないかのような錯覚に陥った」のであった⁽¹³⁾。ところで、こうした編集者たちの思想はどのようなものであったのか。「ただ栄誉だけを求め、鋼のような肉体が疾駆する。鍛え抜いた筋肉が全身で重力に逆らう。振り絞った腕がハンマーを飛ばす。より速く。より高く。より強く。私たちも楽しもう」との無邪気な思想で紙面は作られていたように思える⁽¹⁴⁾。年々激しい販売競争の中で、オリンピックは新聞各社の生き残り戦略にとって恰好の材料（ネタ）を提供したに相違ない。記者たちは与えられた使命を達成するのに最大限の努力を傾注した。し

かし、その結果として、ここにはマスメディアのもつ無批判的な大衆迎合という側面が、かなり明瞭に現れていることは否定できない。これは一体何を意味するのであろうか。

アテネ五輪で「オリンピック停戦」は実行されなかった。イラクでは五輪期間中も、イラク市民に対する米軍による無差別大量殺戮は中断されなかった。このことが示しているものは何か。それは、世界の一角での過酷なジェノサイドの事実にもかかわらず、マスメディアの報道を通して、大衆はオリンピックを「楽しむことができる」ということであるに相違ない。換言すれば、オリンピックを（否応なしに）楽しむことで、ジェノサイドの事実を見ないでおくことができたのである。こうしたことがなぜ可能なのか。これを何と表現すればいいのか。

歴史的な文脈を無視して、ヴァルター・ベンヤミン（1892-1940）の言葉をあえて引用するならば、「大きな祝祭の行列や大集会や大衆的なスポーツ大会、あるいは戦争、これらは現在すべて撮影装置に受けとめられるものであるが、ここで大衆は自分自身と対面する」⁽¹⁵⁾のである。ここで、自分自身と対面している大衆の視野には、ジェノサイドは入ってこないに相違ない。なぜなら、マスメディアを通じて大量に供給されるのはオリンピックの報道であり、それを「楽しむ」ためには他の一切を佚雑物として視野の外に放逐する必要が生じるからである。「疾駆する鋼のような肉体」は、確かにそれ自身美しい。しかしそれはジェノサイドのような不快を催す佚雑物を排除したところに成り立つ美しさである。そうした「美」は——それが美しく見えれば見えるほど——世界のより広いコンテクストの中では、空虚で空しいものとなってしまおうであろう。曲りなりにもそれが美と認知されるためには、見る者の視野が極度に限定されなければならないのである。そして、そうした状態が持続するならば、視野の狭隘化という「美」の条件が忘れ去られ、美はそれ自身で自立するものとして現われてくる。オリンピックを見る者の眼に、世界は美しく立ち現われてくる。ベンヤミンはこうした政治状況を「政治の耽美主義（美学化）」と名付けた。そして、そうした状態をもたらす主体を「ファシズム」と同定したのである。そのような状況に丸ごと絡めとられた者の眼には、戦争さえ美しく見えるかもしれない。しかし実は、それは必然的でさえあるのだ。なぜならベンヤミンの言うように、「政治の耽美主義のためのあらゆる努力は、必然的にひとつの頂点をめざしている。この頂点とは戦争にほかならない」⁽¹⁶⁾からである。その時、「人間の自己疎外はその極点に達し、人間自身の破滅を最高級の美的享楽として味わうまでになったのである。これがファシズムのひろめる政治の耽美主義の実体である」⁽¹⁷⁾とする。ここまで来れば、われわれは彼とともに次のように言うことができるかもしれない——戒厳下のオリンピックに直面して。すなわち、「オリンピックに栄えあれ、よし世界のほろぶとも」、と。

ところで、こうした政治の美学化が成り立つための人間の歴史認識における条件は何であろうか。それは、「歴史が現在という瞬間的状况のうちに解消されてしまうこと」⁽¹⁸⁾（カール・マンハイム）であろう。その時、人間の階級意識は希薄化し、個々人は自分の置かれている社会での位置や階級的な方向づけを見失う。そして、その後に「大衆」が成立するのである。歴史的には1933年1月、ドイツにおいてヒトラーが政権を掌握した。これ

は、第1次世界大戦後の1919年6月に調印され、ドイツに過重な賠償義務を課したヴェルサイユ条約の直接の結果であった。ケインズが不吉にも予言したように、「新たな軍事勢力が……世界の軍国主義の灰の中から不死鳥のように蘇って、新たなナポレオンの支配体制を打ち立てる」ことになった⁽¹⁹⁾。そして1936年8月、ベルリン・オリンピックが開催された。ヒトラーは女流映画監督のレニ・リーフェンシュタール(1902-2003)にオリンピック記録映画の制作を依頼した。こうして歴史に残るオリンピックの映画——『民族の祭典』および『美の祭典』——が出来上がった。その功績により、最高の榮譽として彼女に「1938年度ドイツ国家賞」が授与された。その映像は、確かに美しい。しかし、空虚である。そこには、当時のドイツ社会の美学化された政治状況が——リーフェンシュタールの研ぎ澄まされた感受性と映画制作の高度の技巧を通じて——きわめてよく反映されているように思われる⁽²⁰⁾。

政治の美学化の手段(の1つ)は、ヒトラーの時代には映画であった。現代におけるそれはテレビのデジタル放送等の高度情報機器であり、アテネ五輪において、そうした(意図せざる)目的のためにこれらの機器が有効に利用されたのである。

5. オリンピックは平和的か

オリンピックは平和的かと問うとき、まず平和の概念を明確にしておく必要がある。現代平和学によれば、平和とは暴力(Violence)の不在または低減を意味する⁽²¹⁾。ここでいう暴力とは、人が直接的に経験する「直接的暴力」(Direct Violence)、暴力性が社会の制度に組み込まれた「構造的暴力」(Structural Violence)、それらの暴力を正当化する言説である「文化的暴力」(Cultural Violence)の3つの要素から成る複合概念である。すなわち、次式が成り立つ。

$$V = DV + SV + CV \quad \text{①}$$

暴力の不在または低減というとき、これら暴力の3形態すべてが問題とされる。そして、社会で生起する様々な暴力現象——戦争はそうした暴力現象の1つである——に対し、暴力の3形態を区別し、それらの間の相互関係を分析し、全体として暴力がいかに低減されるのかを考察する。

しかし、暴力の否定によって自動的に平和がもたらされるというのではない。平和の概念に至るには、更なる概念装置上の工夫が必要となる。平和は、暴力とは質的に異なる何ものである。しかし、もし平和なるもの(Peace)が存在するのであれば、それは次式を満たすであろう(D, S, Cの意味は①と同じ)。

$$P = DP + SP + CP \quad \text{②}$$

そこで、暴力の状態Vから平和の状態Pへいかに移行するかが問題となる。VからPへの移行は、「紛争の平和的転換」(peaceful transformation of conflict)という概念を考えることで可能となる。暴力は1つの具体的な紛争(コンフリクト)において発生するからである。ここで、紛争「解決」ではなく、紛争「転換」というのは、紛争当事者間の対立の妥協点を調整するのではなく、対立や矛盾から飛躍して新しい創造的な解決法を探し

出すという意味からである。そして、紛争の平和的転換のための必須の要素として、共感 (empathy)・非暴力 (non-violence)・創造性 (creativity) を考える。

V —————→ P ③

紛争の平和的転換

さて、以上の暴力・平和概念に照らしてみると、現代オリンピックの在りようをわれわれはどのように規定することができるであろうか。これまで述べてきたように、現代のグローバリゼーションのもとにおいて、オリンピックは、「競争」・「停戦」・「政治の美学化」といった諸要素を媒介に、戦争と容易に結びつき、さらには戦争 (=直接的暴力) を支持・正当化する傾向がある。オリンピックは競技の文化である。ゆえに、オリンピックのもつ文化的暴力性をわれわれは先ず指摘することができよう。また、オリンピックは構造的暴力の側面をも併せもつ。たとえば、メダルは大国にほとんど独占される。ここには参加国間の主として経済的格差が表現されているであろう。これは1つの構造的暴力にほかならない。さらに、人種間・男女間・年齢間の構造的な差別が存在する。

このようにオリンピックは、「平和の祭典」という常識に反して、種々の暴力的性格を色濃くもっているのである。したがって、(少なくとも現状では) オリンピックを平和的とは到底いうことができないに相違ない。オリンピックをより平和的なものいかに転換していくのか、ここにこそ問題の核心があるのではなからうか。本稿では現代のこの重要な課題について展開することはできない。平和の制度、すなわち構造的平和としてのオリンピックの確立を目指す立場から、オリンピック改革の方向に関して、いくつかの点を指摘するにとどめる。

- (a) 競技者は国家代表ではなく、より多く世界市民を代表する。
- (b) 競技において、競争 (competition) が第一義的ではなく、協力 (cooperation) がより重要である。「競技」概念の再定義。
- (c) オリンピックが求めるものは、停戦ではなく戦争そのものの廃絶である。
- (d) 「政治の美学化」にオリンピックが利用されるのではなく、オリンピックの「政治化」、すなわち真の意味でのオリンピックの政治的自立を図る。
- (e) 競技者間の経済的格差を縮小する。

こうした課題を現実に到達可能な目標として正面から見据えることによって、オリンピックのもつ暴力的性格を、徐々にではあれ確実に減少させて行くことが可能となるのではあるまいか。

文 献

- (1) 週刊朝日増刊「アテネ・オリンピック」、朝日新聞社、2004年、p.38。
- (2) 朝日新聞2004年8月16日付「アテネ五輪は警備が焦点に」。同記事によれば、米国同時多発テロ以降、「欧州では最大規模の警備体制が敷かれた」。

- (3) 拙稿『「世界社会フォーラム」の提起するもの』(「技術と人間」2004年6月号)を参照されたい。
- (4) 桜井万里子・橋場弦編『古代オリンピック』岩波書店、2004年、p.53。
- (5) 周藤芳幸・村田奈々子『ギリシャを知る事典』東京堂出版、2000年、p.26。
- (6) 関廣野『プラトンと資本主義(改訂新版)』北斗出版、1996年、pp.18-19。
- (7) 同書、p.61。
- (8) ソースティン・ヴェブレレン『有閑階級の理論』高哲男訳、筑摩書房、1998年、p.285。
- (9) 周藤芳幸・村田奈々子、前掲書、p.157。
- (10) Pierre de Coubertin, "THE PHILOSOPHIC FOUNDATION OF MODERN OLYMPISM", *Olympism*, Norbert Muller edited, IOC, 2000, pp.580-581.
- (11) 毎日新聞2004年8月14日付夕刊「対テロ戦下のオリンピックー『停戦』の意義かみしめて」。
- (12) ヨハン・ガルトゥング「ガルトゥング平和学講義-1. 平和の理論・第4週「戦争のマクロ・ヒストリー」」(藤田明史訳)、『トランセンド研究—平和的手段による紛争の転換』第2巻、トランセンド研究会、2004年、pp.8-9。
- (13) 朝日新聞紙面審議会「新聞の五輪報道考える」、朝日新聞2004年9月17日付。
- (14) 外岡秀俊・ヨーロッパ総局長「聖地五輪 楽しもう」、朝日新聞2004年8月14日付、第2面。
- (15) ヴァルター・ベンヤミン「複製技術の時代における芸術作品」(1936)、高木久雄・高原宏平訳、『複製技術時代の芸術』佐々木基一編集、晶文社、1999年、p.146。
- (16) 同書、p.47。
- (17) 同書、p.49。
- (18) カール・マンハイム『イデオロギーとユートピア』(1929年)高橋徹・徳永恂訳、中央公論新社、1979年、p.253。
- (19) ジョン・メイナード・ケインズ『平和の経済的帰結』、早坂忠訳、東洋経済新報社、1977年、p.227。
- (20) Leni Rifenstahl, *FIVE LIVES*, edited by Angelika Taschen, TASCHEN, 2000.
- (21) これは現代平和学の創始者の1人であるヨハン・ガルトゥングの平和の定義(の1つ)である。ヨハン・ガルトゥング+藤田明史『ガルトゥング平和学入門』第1章の拙稿「平和とは何か」を参照されたい。